小田原史談

第5号
発行所　小田原史談会
小田原市幸一丁目
郷土化文館内

現代語訳 小田原大秘録（四）

石井富之助

ここに立花の臣堀橘右衛門は日本武者修業をして所々廻国したが続く者がなかった。ところが御屋敷にきて金成与九郎、松下阿随に仕負け甚だ残念に思ったが終に金成の門人となって朝夕稽古に励んでいた。ある時、彌兵衛は橘右衛門を一と間に招いて「貴殿に頼みたいことがある」と言ったので、橘右衛門は「何事でも――と答えると、「彌兵衛は小祿ではあるが、なんとそれがしの養子になっては下さるまいか」

橘右衛門は大いに悦んで「数ならぬそれがしをお望み、これに過ぎたことはございません」と早速屋敷に帰り、堀の家を甥にゆずり隠居して罷り越し、終に養子となり金成安太夫と名乗った。これにより彌兵衛は隠居して休武と号した。この安太夫は後には休也信固と称して、これもまた名人であった。たんぼの槍をもっとあんどうを突きぬくに油のゆりこまぬほどの槍先であった。寛政二戊年まで存命した。

当時、篠崎大助幸成はかねてから金成休武と不和であったが、若君とともに馬場に居るのを見て、篠崎は邪智をめぐらし、誰でも乗りこなせぬ暴馬を引き出してきて「馬に乗ることができなくては御用に立ちがたき場合もある。貴殿一と鞍試みて見給え」と休武の前に引いてきて無理無体に乗馬をすすめた。時に休武は少しも恐れず、たずなをかいぐって乗り出したが、馬の四足に滞るところがなくさしもの暴馬も気に押えられ、猫のごとくになって歩むのを、人々は感に堪えて見物した。その時、篠崎かからからと打ち笑ひ「このように乗り給え」とその馬に打ち乗り、のびをたって歩かせた。その足の上ること陽にはつし、爪の跡は七五三につけられた。さしもの休武も感じ入り「餅は餅屋だ」と言った。

その後、休武はかねての願いの通り、御国勝手を仰せつけられ、国元へ移り御家中に槍術指南をした。一方篠崎大助は享保十七年四月一日、六十二才で剃髪御免を蒙り、隠居して名を卯西と改め、これも小田原へ移った。

同年、忠方卿は御病気になりついに御死去になったこれを現成院殿と言う。御嫡子伝吉郎様御家督御相続あって、出羽守忠興卿と称され、小田原へ御入部遊ばされた。

ある日御退屈のあまりに金成休武を召して、その方の槍術を見たい望まれた。休武はいろいろ御辞退申上げたが御聞きずみなく「誰が午角に闘うか」と御尋ねがあった。休武は答えて「およそ御家中に午角の者ありとはいまだ覚えませんが相手になる者は杉山直道でもありましようか」と申上げたので、直に杉山を召した。折しも杉山は前川へ行き在宿ではなかったので、前川まで迎えを差向け、直道を召し寄せた。

血気の杉山は「たとえ短命に死すとも武士の面目これに過ぎるものがあろうか」と悦び勇んで立ち帰り御前に罷り出た。

その時、槍入務負仰せつけられ、御庭に幕打ち廻わし、真中に槍、長刀をなおした。両人が支度をしてその場に出てくると、並み居る人々は息をつめて見物する。休武は槍、杉山は長刀をとって左右へしずしずと別れたが、休武は槍を構え「御座い〳〵」と声を発した。杉山は長刀を下段にもって詰め寄り、休武の槍先が少しく長刀に乗ると見るや、はねあげて一つさんに走り込んだ。時に休武、後へ引かんとしたが、杉山に近寄られ倒れながらも杉山の胸を三本突いた。しかるに誰あってこれを知らず、休武の負のように見えたので、並み居る人々は「さても杉山は名人かな」とほめそやした。

ところが両人とも「休武が勝」と申上げたので、君も御不審がはれず不思議に思召された。休武は御前へ出て「杉山の肌を御改め下さるよう」と申上げたので、人々驚き杉山を見ると、胸を三本突かれたと見えて紫色にはれ上っていた。これを見る人、心根に徹して感じ入った。両人は「生気の満つるところ槍風ばかりでなおこのように成ります」と申上げた。これを思えば宮本武蔵が吉岡兼房の眉間より血を流させたこともまたもっともなことと思われた。この勝負から杉山は一生早道ができず、またうつむく事ができなくなったということである。君もまた御一生の間後悔遊ばされた聞くが、有難いことである

その翌年、享保十八年正月二十一日金成休武は病を得て没した。その死を惜しまぬものはなかった。

金成安太夫は頼みと思った父におくれ、手のものを失い足の踏み所もないように力を落とし、せんかたなく神谷与右衛門の門人となって無敵流を学んでいた。この神谷は剣術においては近代無双の名人で、いにしえの佐々木岸柳といえどもおさおさおとらないほどの芸術であったから、不思議の事が度々あった。棚から落ちる神酒錫をつかみ、近目であったが竹刀をもって構える時は闇の夜でもはっきり見えたということである。

頃は秋のことで、太守が御参府遊ばされるはずのところ、秋雨が降り続き酒匂川満水のため御延引になっ

三面へ続く

小田原の藩政と報徳仕法覚(二)

古屋安定

百姓尊徳と大勘定奉行鵜沢作右衛門との関係について、その日記や書翰数から僅かの間に主格顛倒、既に大二宮尊徳の風格を表して来た次第を、本題(一)に於て私は述べた。佐々井信太郎翁の名著「二宮尊徳伝」を見ると、尊徳と服部家との関係（第三章服部の復興）や藩政改進献（第四）等について、詳細に亘って説述されているが、鵜沢の事には余り触れていないけれども、財政難の厳しかった当時、服部家の復興に関連して、鵜沢は自分の職責上の仕事の面でも、尊徳の偉材に負うところが、尠くなかったことであろうと思はれる。それは、あたかも財閥の勃興が政治を動かすように、鵜沢も直接間に尊徳の力を借りることが多かったのであろう。と思はれるのである。尊徳が算数にたけていたことは、人のよく知るところであるが、少年時代から苦学力行した彼が、天地自然の道から発足して一円融合の世界を開拓して行ったのは、当時の一つの学風でもあったかも知れないが、恐らく江戸で需めたであろう貝原益軒の著「大和俗訓」を鵜沢に献本するあたり、彼の思想の進展も著しいものがあったろうと思はれ、それが又、政界の知名人に知己を得ることにもなったのであろう。彼の服部家の仕法は余りにも有名なので、私は本稿の最初に鵜沢を持出したが、服部家は千二百石取の家老第三席で、そこの財政整理に彼が挙用されたのだから、仕事の内容も大きく交渉の範囲も広くなる。福住正兄の二宮翁略伝には同家の三子の若旦那附の若党として雇はれ、傍、自分の勉学の機を得ようとしたと伝え、藤高行の二宮翁語録では、父の遺志を実現するために納米用斗桝改正の機を窮う便宜が得られるかも知れないとして、同家に入ったように記されているが、恐らく何れにも真があるであろうけれども、彼が大久保侯から容れられて作製した斗桝には、「謹権量審法度」と政道の要諦を刻みつけている。この時彼が貰った賞状には、郡奉行早川茂右衛門、竹内藤右衛門、関小左衛門の名が記され、代官は鵜沢作右衛門、源水銓右衛門、特に彼の為に骨を折って呉れた家老は、吉野図書服部十郎兵衛であった。彼に依れば（小田原領桝改正覚書）

右御升不同に付御領分百姓共難渋蔵稲葉様之御代度々平均蔵度好御用捨相願又御当代にも願立候得共郡奉行御代官其他取扱役人御叱被仰付候のみ御召し彼下候儀は毛頭無御座候時国候哉数年艱苦一時に免れ難有事限なし…

と、ある。時に文政三庚辰年十月、彼は三十四歳であった。

服部家仕法中、要路の人達との交渉も次第に深くなって行ったことは云うまでもないが、一面、上下の世話にも通じて、官民一般の危局打開のために、五常講の設立、八朱金の貸下にも乗り出したが、彼は服部氏を動かし、吉野図書の協力にも成功して、着々事業を拡大して行った。こうして彼は、服部家を舞台に次第にクローズアップされて行くのであるが、今迄挙げた諸氏は又、多くは服部家に関連を持つ人達でもあってもう一人忘れてならない人に、御番頭格で百五十石を食む、三幣又左衛門があるけれども、これについては何れ後に述べる機会があるので、ここには触れないことにする。

富田高慶著「報徳記」に依ると、

「故大久保侯天下の執権職として、流弊を矯め汚俗を一洗し、善政を布き万民を安ずるの忠心を懐き、一世国家の為めに心力を尽し玉ひ、人賢明を以て之を称す田間潜龍の二宮あることを聞き玉ひ、大いに悦びて之を挙げ国政を任じ、安民の道を開かんと欲し、群臣に計り玉ふ」けれども、

「玉風賢愚を選まず、位祿の高下を以て区別を厳にし高祿の臣は卑格の臣を見ること奴僕の如く、位ある臣は愚なりといへども、衆之を数し、才徳ありといへども位格卑下なれば論人之を軽んず。治平の流俗習ひ性となり。一藩すら斯の如く況や下民に於るをやり」と時勢の非なるを説いて、若し「仮令二宮賢なりといへども、群臣服せざる時は必ず国の災を生ぜんこと恐るべし」と反対するものが多かった。こうして少数派の意見は破れたが、大久保侯は、

「然らば二宮に命ずるに、諸人の力に及ばざる所を以てせば、彼必ず其の功を遂げん。其の功を以て群臣の僻心を除き、国家を任せば誰か又不平を発せんや。事迂遠に似たりといへども、金功をなさん事必ず斯にありと」こうして、尊徳は宇津家桜町三邑四千石復興の大任を負はされることになるのであるが、文政政四年八月から前後六回彼地を訪ね、独自の調査検討を重ねた結果作製した「十ケ年御物成米永共御趣法御土台金平均帳の奥付に、尊徳はこう述べている。

「右者村柄取所御趣法被仰出候付、文化九壬申年より文政四辛巳年迄拾ケ年、米永平均致候処如斯御座候以上」次に行を改め、

語曰、殷因於礼所損益可知也、周因於殷礼所損益可知也、其或継周者雖百世可知也。

又曰、尊徳性而道問学、致広大而尽精微、極高明而道中庸、温故而知新、敦厚以崇礼

文政五壬午改之　二宮金次郎

私には氏の聖語を説く資格はない。只だ、後年彼が「尊徳」を号したのは、恐らく氏から発しているのではなかろうかと愚察しているのである。

子の曰く、殷は夏の礼に因る
損益する所知る可し
周は殷の永に因る
損益する所知る可し
其れ周に継ぐ者あらば
百世と雖も知る可き也
（論語）

故に君子は徳性を尊で問学に道る
広大を致して精微を尽す

高明を極めて中庸に道る　敦厚にして以て礼を崇む（ダット）
故きを温ねて新しきを知る　（中庸）

小田原周辺の遺跡分布とその概要

――縄文式文化時代について――④

橋口尚武

縄文式文化時代中期になると遺跡の数が一段と増加し他地方と同様、遺跡の規模が大きくなる。顕著な例として小田原市久野一本松、同欠の上、同天子台、星山台地、谷津金の台、南足柄町三竹山東電変電所附近、同塚原玉峰等が知られ、表面採集される。遺物の量も急増し種類も多種多様となり、生活様式の進歩を推量することができる。すなわち、これらの遺跡にはおびたゞしい黒燿石族の散布がみられ、狩猟を生業とする集団生活が営まれた事が想像されて、割合と安定した生活状態であったろうとみなして良い（自然に左右される縄文時代人であってみれば勿論今日と比較できないが）又多古丘陵以南の遺跡からは例外なく石錘も発見されており、漁労をも営んでいたことがわかるが、漁イの生活を考察するには資料に欠けている縄文中期から後期にかけての住居址としては学術的調査にあまり恵まれていない当地方においては堅穴住居址の発見は数ケ所に及び小田原市谷津綜合グランド、同久野、南足柄町雨坪、同狩野（立正大調査未報告）桐和村芭蕉、秦野金目台、下中村沼、平塚市吉沢（壁応大調査未報告）等が知られ、時期期判定の資料に欠けるものもあるが、縄文中期の勝坂武、加曾利E式、縄文後期の堀ノ内式土器を有する各文化に伴っている。縄文式文化時代後期の遺跡は前述の縄文中期の遺跡と複合するのがほとんどで、中期から後期にわたって長期間生活したことが考えられるが、薄手で黒色研磨された加曾利B式土器を伴う遺跡は、久野欠の上沼田めぐみ幼稚園の西方二〇〇米附近に限られており、又縄文後期の土器は堀ノ内式、加曾利B式土器が多く、利器もおそらく縄文中期のものと大差なかったろう。縄文式文化時代晩期になると小田原周辺で遺跡の例がまだ知られていないようである。この点は縄文後期からの急激な人口減少も考えられないし、終末近くなるに従って東進してくる弥生式文化との関係も考察しなければならずさらに南関東における「文晩期の性格がほとんど解明されていない現在、今後の大きな課題となろう。

以上が小田原周辺における縄文式時代各期の概論であるが、今日まで数多く提唱されつゝも、資料不足と調査困難のために結論が出ていない問題として、文化の伝播と小田原周辺の縄文中期・後期の土器片と共に多く表面採集される丹沢系の緑泥岩製の短冊形打製石斧、原石産地不明の玄武岩製各種石器など、近距離ではあろうけれども、その交易圏は不明である。西北方を山に囲まれた小田原へ文化がどのような径路をたどって伝播してきたのか、これら二つの課題は周辺の遺跡分布を詳細に調査した上でないと結論ずけられない大きな問題である。（終）

一頁より続く

たが、田地の流れるうれいはないことを御尋ねがあったので申し上げた。これは先年広仲伊右衛門が酒匂川から岩流瀬のあたりまで巡見して、柏の木□田淵の方へ水口を向け、それから吉田島村三百間の堀を流し、川音の水口より上の方へ流しかけ、九十間等の土手は手入無用ということで、思いもかけぬ土手を丈夫に構えさせ、あるいはあそこの土手は普請無用というように所々方々を指図して帰った。その年八月に至って、秋雨降り続き大雨車軸を流して篠つくごとく降り川はみなぎり流れて諸人心を痛めた。しかし丈夫にした土手へ押しあて、その外手入なき土手には当らずして、飛鳥川の淵瀬とかわり思いもかけぬ所に押し当てたが、どこもかしこも丈夫に構えてあるので、水のうれいはなく、その年も無難にすみ、それからしばらくは水損はなかった。ところが去る申年に格別の大水で大口岩流瀬の土手が押し切られた。この時までは右の譜請で間に合ったと聞いているが、大破について御届けをしたので、公義から奉行として田中休愚右衛門と う者が来て普請を完成した満水となっても水損はないとのことであった。同十一日太守は御参府遊ばされた（つゞく）

国外上人と定光院の末路

穂坂辰己

上人は此の寺に住んだが「一座臥寸心間」「六窓深困」「意の如くならぬ故、二百米はなれた西方にある古墳址の横穴に「応接不暇」ひそかに穴居した。此の横穴は入口四尺、奥行三間半、高さの高き部分は七尺、奥は一段高く床面が二尺高くなっている。

床の高き所に円相の風外上人寿塔。下の段の左に寄進者の碑、右の碑に父母の碑があって側面に寛永五季成辰八月吉日と明記さる。上人は此の穴に何年か住んだが、其の徳望を慕い来る者、益々多きをなげき、遂に真鶴の岩窟に遁れたのである。此の穴は私より以前に既に難波明先生が発見して居られた事を後日知った風外上人の調査研究家、上野の博物館の竹内尚次先生を昨年の五月案内した。先生の技術的の拓本に依って三個の自然石に刻銘した記録が明白になった。（続）

第五号
昭和三六年十二月十五日発行（毎月一回発行）
会費　一ケ年三百六十円
発行　小田原史談会
編集人　機関紙発行委員会
発行所　小田原市幸一丁目　郷土文化館内　小田原史談会

平野商会
平野久雄
小田原市十字三
電話(〇四六五)二四四九番

写真
イガラシ
小田原市幸3
TEL2534番

趣味の陶器
江島屋
小田原箱根口
電話6602

鮨
志澤
TEL3131

株式会社
小田原百貨店
社長　神戸英次郎

明るい生活
楽しい読書
八小堂
小田原駅前　TEL5388～9

小田原報徳
自動車株式会社
太陽自動車
株式会社
代表者　曾我律之助

伊豆箱根鉄道株式会社
大雄山線
運営事務所

あなたの洋品店
はふや
小田原幸町
TEL2307

小田原信用金庫

きそば
寿庵
小田原駅前
電話二八六二番

松坂屋製菓本舗
小田原市十字二
電話五二七六番

高級陶器の店
小田原市緑1～103
小田原銀座通り
株式会社江島屋陶舗
TEL(0465)5427

甘露梅
月の衣
小田原駅前
正栄堂菓子舗
電話 5311
5312

寝具の店
花田屋
小田原銀座2
電話3788番

カメラ・写真用品
なんでも揃う
カメラの光輝堂
小田原駅前TEL 5965 4859

便利で
楽しいお買物は
小田原駅前
箱根登山デパート

箱根登山鉄道株式会社
電話小田原(0465)4111

西洋料理
御土産各種
あさひ
小田原駅前
TEL2680・2681・3051

御料理
御弁当
仕出し
株式会社
東華軒
代表取締役　飯沼相三郎
小田原駅前～
TEL(0465)5061～2

株式会社
オダワラ薬局
純良医薬品
錦通り電三、〇四八

化粧品
おしゃれ彩華
松屋
小田原錦通り
電話三三三六

松風
銘菓
千代菊
銘菓
甘露梅
銘菓(県指定の店)
電話2376
集栄堂本店